

## 学校教育における住居領域の教材開発（Ⅰ）

### －かるた教材の組み立て－

黒 光 貴 峰〔鹿児島大学教育学部（家政教育）〕・中 村 一 絵〔鹿児島県立山川高等学校〕  
徳 重 礼 美〔鹿児島大学大学院教育学研究科〕

## Development of Teaching Materials in the Housing Field of School Education（Ⅰ）

### －Production of Teaching Materials based on "Karuta"－

KUROMITSU Takamine・NAKAMURA Ichie・TOKUSHIGE Hiromi

キーワード：家庭科教育、住居領域、教材開発

### Ⅰ. はじめに

学校教育における家庭科教育の課題の1つに、各領域に費やされる指導時間の差があげられる。各領域の指導状況について、速水ら<sup>1)</sup>は、中学校、高等学校家庭科教員を対象に調査を行った結果、住居領域は他の領域と比べて授業時間の配分が少ない、宮崎ら<sup>2)</sup>は、高等学校家庭科での生徒の住居領域の学習経験は半数以下であると報告している。住居領域に費やされる指導時間が他の領域と比べて少ない要因の一つに、碓田<sup>3)</sup>は、住居領域に関して教えるのと感じている教員が多い、岡田ら<sup>4)</sup>は、住居領域は、生活の場で決定する場面が少ないことから生徒の関心が低いと報告している。一方、鳥居<sup>5)</sup>らは、住居領域は、実験・実習の難しさ、実践例が少ない、宇野<sup>6)</sup>は、適切な教材や副読本の不足を報告している。住居領域の教材の不足については、関川ら<sup>7)</sup>が市販されている教材の実情を調査し、種類や数が少ない、値段が高く教育現場への導入が難しいという問題点を報告している。

住居領域の教材開発については、関川、黒光らが情報機器を導入した教材開発<sup>8)~11)</sup>を、宇野<sup>12)</sup>、西島<sup>13)</sup>、碓田<sup>14)</sup>、田中<sup>15)</sup>らが地域性を取り入れた教材開発の報告を行っている。また、分校ら<sup>16)</sup>は、高等学校「住居領域」の教育内容、方法の検討を、岡田、白井ら<sup>17)18)</sup>は、ライフステージでとらえた住居領域の授業実践を行っている。これらの報告では、教材開発事例とあわせて、適切な授業や教材を開発することは、教育現場で大変効果的であることが確認されている。

そこで、本研究では、教員の苦手意識が強い領域である住居領域の教材開発を行うことにより、家庭科教育を充実させることを研究目的としている。以上の目的を果たすために、住居領域の教材開発の前段階として、教育現場の実態の把握を行った。具体的な研究方法としては、教員および生徒にアンケート調査を行い、指導の実態、意識を明らかにした。教員に対するアンケート調査は、調査時期2009年8月、調査対象は、小・中学校および特別支援学校の教員である。調査内容は、①属性（性別、年齢、勤務校種、出身地、勤務年数）、②普段の授業での工夫点、③普段の授業で使用している教材・教具、④授業に役立つ教材・教具、⑤鹿児島県の伝統や文化を生かした授業の実施状況、⑥地域の人の協力を得た授業の実施例、⑦家庭科を教える上での不安点である（表1）。

表1. 調査対象者（教員）の概要

調査対象	小・中学校および特別支援学校の教員39名					
調査時期	2009年8月					
属性	選択肢	%	属性	選択肢	%	
性別	男 性	17.9	出身地	鹿児島県	84.6	
	女 性	82.1		鹿児島県以外	15.4	
年齢	20歳代	2.6	勤務年数	1～10年	10.3	
	30歳代	51.3		11～20年	61.5	
	40歳代	46.2		21～30年	25.6	
勤務校種	小学校	61.5		31～40年	0.0	
	中学校	23.1		無回答	2.6	
	特別支援学校	15.4	全体		39名	

生徒へのアンケート調査は、調査時期、2008年11月～12月、調査対象は、鹿児島県内の中学生である。調査内容は、①家庭科の好き嫌いとその理由について、②好きな授業形態、③かるたの経験についてである（表2）。

表2. 調査対象者（生徒）の概要

調査対象	鹿児島県内の中学生	
調査時期	2009年11月～12月	
属性	選択肢	%
性別	男 性	48.5
	女 性	51.5
全体		303名

## II. 結果

### 1. 教員に対するアンケート調査

#### (1) 普段の授業で工夫していること

「普段の授業で工夫していることは何ですか」という質問を設け自由記述で回答を得た（表3）。最も多かった回答は、「プリントやワークシートを作成する」26票であった。その他に、「体験的な活動を取り入れる」11票、「具体的な実物を利用する」、「板書カードを使用する」、「板書計画を工夫する」が各4票みられた。

表3. 普段の授業で工夫していること

回 答	票
プリントやワークシートを作成し使用する。	26
体験的な活動を取り入れる。	11
具体的な実物を利用する。	4
板書カードを使用する。	4
板書計画を工夫する。	4
地域や子どもの実態にあった教材を使用する。	3
イラストや写真を取り入れる。	3
パソコンを使用する。	3
広幅用紙を使用する。	2
視覚的な教材・教具を使用する。	2
グループ活動を行う。	2
鹿児島県版の家庭科ノートを使用する。	1
基礎基本を徹底する。	1
チラシを活用する。	1
ミニテストを行う。	1

平成22年1月に報告された文部科学省の「学習指導と評価に対する意識調査<sup>19)</sup>」結果では、日ごろどのような授業や学習指導を心がけているかという質問に対し、中学校技術家庭科（家庭分野）、高等学校家庭科ともに、「教科書などの課題に加え、教員が独自に工夫した教材や実技の課題を扱う授業」が最も高くなっている。また、その他にも「本時のねらいや目標を授業の導入部などでしっかり明示する授業」、「観察や実験を行う、現場で実物に触れるなど、体験を重視する授業」が重視されている。

#### (2) 普段の授業で使用している教材・教具

「普段の授業でどのような教材・教具を使っていますか」という質問を設け自由記述で回答を得た（表4）。最も多かった回答は、「板書カード」17票で、次いで、「パソコン」16票、「ビデオ・DVD」11票であった。その他に、「具体的な実物の提示」8票、「写真」7票、「ワークシート」5票がみられた。

表4. 普段使用している教材・教具

回 答	票
板書カード	17
パソコン	16
ビデオ・DVD	11
具体的な実物の提示	8
写真	7
ワークシート	5
CD・カセットテープ	4
本・絵本・雑誌	4
玩具	4
絵や文字のあるカード	3
教科書	3
紙芝居・紙人形	3
模型	2
OHP	2
マス目黒板	1
電子黒板	1
鹿児島県版の家庭科ノート	1

#### (3) 授業に役立つ教材・教具

「どのような教材・教具があれば授業がしやすいと思いますか」という質問を設け自由記述で回答を得た（表5）。最も多かった回答は、「使いやすい教材」15票で、次いで、「繰り返し使える教材」、「お金がかからない教材」各13票、「汎用性が高い教材」9票であった。また、「視覚的な教材」、「パソコン・プロジェクター」各8票、「DVD・ビデオ」3票という回答も得られた。

表5. 授業に役立つ教材

回 答	票
使いやすい教材	15
繰り返し使える教材	13
お金がかからない教材	13
汎用性が高い教材	9
視覚的な教材	8
パソコン・プロジェクター	8
DVD・ビデオ	3
電子黒板	3
授業実践のついた学習プリント	2
マス目黒板	2
板書カード	2

#### （４）鹿児島県の伝統や文化を生かした授業

「鹿児島県の伝統や文化を生かした授業を行っていますか」という質問を設け自由記述で回答を得た（表６）。最も多かった回答は「郷土料理の紹介や調理実習」27票、次いで、「行事や遊び、方言等の伝統・文化についての学習」14票であった。

表 6. 伝統や文化を生かした授業の実施状況

回 答	票
郷土料理の紹介や調理実習	27
伝統・文化についての学習（行事・遊び・方言等）	14
特産物の栽培（さつまいも等）	5
老人ホームや幼稚園への訪問	1

#### （５）地域の人の協力を得た授業の実施例

「地域の人の協力を得た授業を行っていますか」という質問を設け自由記述で回答を得た（表 7）。最も多かった回答は、「さつまいもなど鹿児島県の特産物の栽培等を行っている」23票であった。その他に、「昔の遊びを教わっている」8票、「郷土料理を教わっている」、「昔の地域の様子などを話してもらっている」各５票であった。

表 7. 地域の人の協力を得た授業の実施例

回 答	票
特産物の栽培（さつまいも等）。	23
昔の遊びを教わっている。	8
郷土料理を教わっている。	5
昔の地域の様子などを話してもらっている。	5
踊りや歌を教わっている。	3
保育園などを訪問している。	3
方言を教わっている。	2
被服実習に参加してもらっている。	2
給食関係や農家の人に話をしてもらっている。	2
職業体験を行っている。	2
英語学習に参加してもらっている。	2
大豆の加工品（豆腐・みそ・納豆）を教わった。	1
お茶の入れ方を学んだ。	1
消費生活センターの人に話をもらった。	1

#### （６）家庭科を教える上での不安点と要望

「家庭科を教える上での不安点と要望はありますか」という質問を設け自由記述で回答を得た。不安点としては、「内容によって教材・教具が少なく教えるのが難しい」10票が最も多く、次いで、「実習での安全面や技術面」7票であった（表 8）。要望としては、「指導力をつけるために校内研修をしてほしい」3票、「家庭状況が違う生徒でも対応できる教材の提供」、「視覚的にうったえる教材の提供」、「施設設備の充実」各 2 票であった（表 9）。

表 8. 家庭科を教える上での不安点

回 答	票
内容によって教材・教具が少なく教えるのが難しい。	10
実習での安全面や技術面	7
取り扱いやすい内容と扱いにくい内容がある。	4
兼任であるため授業の準備が大変である。	1
男子生徒への対応	1
授業時間数が足りない。	1

表 9. 家庭科を教える上での要望

回 答	票
指導力をつけるために校内研修をしてほしい。	3
家庭状況の違う生徒でも授業のできる教材の提供。	2
視覚的にうったえる教材の提供。	2
施設設備の充実	2
住居領域の教材がほしい。	1

## 2. 中学生に対するアンケート調査

### （１）学習者の家庭科に対する意識

家庭科に対する意識について、図 1 のような選択肢を設け回答を得たところ、「好き」30.1%、「どちらともいえない」56.6%、「嫌い」13.2%であった。

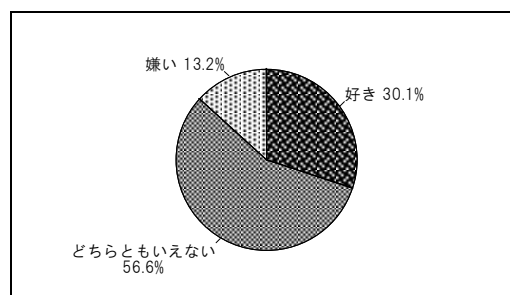


図 1. 家庭科の好き嫌いについて（計303名）

また、性別と家庭科に対する意識との関係を見たところ1%水準で有意差がみられた。男性は、「好き」22.4%、「どちらともいえない」58.5%、「嫌い」19.0%、女性は、「好き」37.4%、「どちらともいえない」54.8%、「嫌い」7.7%であった（図 2）。

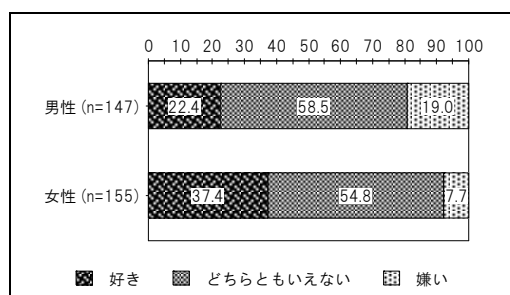


図 2. 家庭科の好き嫌いについて P < 0.01

次に、家庭科の好き嫌いの理由について、自由記述で回答を得た。その結果、家庭科を「好き」と回答した生徒の理由としては、「調理実習や被服実習が楽しいから」45票が最も多く、次いで、「自分で作ったものを食べることができるから」24票、「一番生活に身近で将来に役立つと思うから」8票、「被服実習で小物作りなどができるから」5票などの回答が得られた(表10)。

表10. 「好き」と回答した生徒の理由

「好き」と回答した理由	票
調理実習や被服実習が楽しいから。	45
自分で作ったものを食べることができるから。	24
一番生活に身近で将来に役立つと思うから。	8
被服実習で小物作りなどができるから。	5
調理実習や保育の勉強が楽しいから。	3
友達と協力して何かをすることができるから。	2
小物作りや幼稚園児との触れ合いが楽しいから。	1
料理、裁縫、幼児について学ぶことができるから。	1
知らないことを知ることができるから。	1
なんとなく楽しいから。	1

「どちらともいえない」と回答した生徒の理由としては、「好きな単元と嫌いな単元があるから」59票が最も多く、次いで、「調理実習は好きだが裁縫が苦手だから」20票、「実習などは楽しいがテストができないから」18票、「不器用だから」11票などの回答が得られた(表11)。

表11. 「どちらともいえない」と回答した生徒の理由

「どちらともいえない」と回答した理由	票
好きな単元と嫌いな単元があるから。	59
調理実習は好きだが裁縫が苦手だから。	20
実習などは楽しいがテストができないから。	18
不器用だから。	11
家庭科自体が好きでも嫌いでもないから。	7
特に理由はない。	6
授業があまり分らないし、楽しくないから。	5
ただなんとなく受けているから。	4
黒板に書くだけの授業でつまらないから。	4
何かを作ることは好きだが、きれいに作れないから。	4

「嫌い」と回答した生徒の理由としては、「難しいから」8票、「授業が楽しくないから」6票、「不器用だから」5票などの回答が得られた(表12)。

表12. 「嫌い」と回答した生徒の理由

「嫌い」と回答した理由	票
難しいから。	8
授業が楽しくないから。	6
不器用だから。	5
テストができないし難しいから。	4

## (2) 好きな授業形態について

好きな授業形態について、表13のような6つの選択肢を設けて複数回答で回答を得た。最も多かった回答は、「調理実習など実習をする授業」72.2%、次いで、「パソコンを使った授業」56.6%、「実験や観察をする授業」36.8%、「ビデオを見て学ぶ授業」27.5%、「図書館で調べ学習をする授業」15.2%、「黒板で教科書の内容を説明する授業」6.3%であった。

表13. 好きな授業形態(計303名)

好きな授業形態	%
調理実習など実習をする授業	72.2
パソコンを使った授業	56.6
実験や観察をする授業	36.8
ビデオを見て学ぶ授業	27.5
図書館で調べ学習をする授業	15.2
黒板で教科書の内容を説明する授業	6.3
合 計	303名

## (3) かるたの経験

かるたの経験について図3のような選択肢を設け回答を得たところ、「経験あり」97.0%、「経験なし」2.5%、「無回答」0.5%であった。

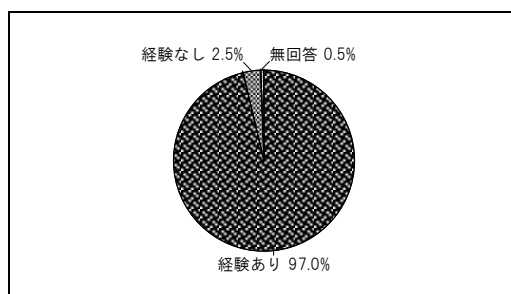


図3. かるたの経験(計303名)

## 3. 住居領域の教材開発に向けて

教員への調査からは、授業で役立つ教材として、「使いやすい」、「繰り返し使える」、「お金がかからない」といった視点があげられた。生徒への調査からは、興味・関心が高い教材として「視覚的に理解することができる」、「実習・演習を行える」という視点があげられた。それらの結果を踏まえ、当研究では、教材開発の手法として「かるた」に着目した。かるたは、絵札と読札に分け、形象または語句・短歌などを書いたものである。

表14. かるたの事例

名 称	概 要（商品説明より引用）
精選 理科かるた	リズムカナル読札と正確で美しい絵札で理科のおもしろさを感じられるよう工夫されているかるた。楽しく遊びながら理科学習ができる。
食育かるた	十勝郷土料理研究会が、子どもたちの心身の健やかな成長を願って作ったかるたである。全ての読み札に食育に関する簡単な説明がついており、親子で楽しく学べる。また、楽しいイラストを見ながら、ひらがなを覚える学習教材としても使うことができる。
エコかるた	エコかるたは、朝日新聞の創刊130周年企画として「地球のためにできること、エコのためにできること」をテーマに全国から募集したものである。42,785句の応募の中から、選考委員による審査の結果46句が決定された。選ばれたエコかるたには、毎日の暮らしのなかにあるエコのヒントやかけがえのない地球への想いが込められている。なお、ホームページからエコかるたのダウンロードをすることができる。
環境かるた	身近な環境問題を五・七・五で表現。環境に関する情報が頭に入ってくる。絵札の裏に解説が掲載されており、楽しみながら環境学習ができる。
江戸いろはかるた	「大も歩けば棒にあたる」で始まる定番のかるた。岩波ことわざ辞典の解説書、ことわざの英訳、英文によるいろはかるたの解説つき。
京いろはかるた	江戸との違いを比べながら遊ぶより楽しい。和文の解説書、ことわざの英訳、英文によるいろはかるたの解説つき。
海上保安庁かるた	子どもから大人まで楽しみながら海上保安庁の業務について知ってもらうことを目的に製作されたかるたである。発案したのは、門司海上保安部で、海上保安庁の認知度を上げるために自ら絵札を作成した。海上保安長海上保安部のホームページで公開されている。
魚魚（とど）あわせ	魚偏の漢字をかるたに。地方ゆかめ魚を絵と言葉で紹介し、2枚のカードで絵合わせと漢合わせが楽しめる。
無地かるた	自分達で自由に作れる無地かるた。箱も無地なので自分だけのオリジナルかるたを造ることが出来る。

表15. 鹿児島県の郷土かるたの状況

名称	地域・発信地	制作・発行（年）
かこしま郷土かるた	鹿児島県	鹿児島県教育委員会(1985)
平成かこしまカルタ	鹿児島県	鹿児島県青年会議所 心の教育委員会 (有) エゾの太出版
鹿児島こぼあそびかるた	鹿児島県	植村紀子、原田美夏 (株) 南方新社(2004)
島津いろは歌	鹿児島県	戸田勝範・出版文化社(2005)
鹿児島ことわざカルタ	鹿児島県	大古千明・(株) 南方新社(2006)
カゴマサカルタ	鹿児島市	伊敷校区成人学校「史跡・伝承クラブ」(2006)
いちきかるた	いちき串木野市	(社) 串木野青年会議所(2008)
日新公いろはかるた	南さつま市	(社) 加世田青年会議所(1984) 県立加世田高校創立80周年記念(1992改訂)
日新公いろはかるた 〔島津忠良作歌〕	南さつま市	加世田市教育委員会(1987)
ふるさと霧島カルタ	霧島市	霧島市教育委員会(2009)
くしきのかるた	いちき串木野市	(社) 串木野青年会議所(2002)
くまじよん歌留多	薩摩川内市	市立隈之城小学校区(2005)
あづま郷土かるた	長島町	東町教育委員会(1992)
長島郷土かるた	出水郡長島町	長島の子ども会育成連絡協議会
ふるさとカルタ	南九州市	頤娃町教育委員会(2004)
島口カルタ	大島郡宇検村	村立名柄小中学校
よんかるた	大島郡与論町	清野士半(2006)
与論(ヨソ)カルタ	大島郡与論町	与論カルタを創る会 NPO日本子ども未来支援ネットワーク(2007)
与論の方言かるた	大島郡与論町	Kimiko(2008)
きよはら郷土カルタ	南さつま市	町立清原小学校(2003)
串良郷土かるた	鹿屋市	串良町教育委員会(1992)
屋久島カルタ	屋久島町	町立宮浦中学校
屋久町郷土教育カルタ	屋久島町	屋久町教育委員会
里村郷土かるた	薩摩川内市	里村教育委員会(1992)
つるだの郷土カルタ	さつま町	鶴田町教育委員会(1992)
志布志郷土かるた	増於郡志布志町	志布志町郷土教育教材開発委員会(1992)

日本郷土かるた研究会HPより参照

正月遊びの一つとして使用されているほか、理科や食育、環境などに興味・関心を持たせるために作成されたものもあり、教材として活用されるなど幅広く利用されている（表14）。

日本郷土かるた研究会の報告によると、全国では1723種のかるたが作成されており、鹿児島県では25種確認されている。郷土の地域性を題材に表したかるたも作成されており、地域性の導入など発展性にも富んでいる（表15）。

### Ⅲ. まとめと考察

以上、教員および生徒にアンケート調査を行い、指導の実態、意識を明らかにした。その結果、教員への調査からは、家庭科を教える上での要望として、指導力をつけるために校内研修、家庭状況が違う生徒でも対応できる教材の提供など、教材・教具、研修の充実があげられていた。教員が普段の授業で工夫していることとしては、自分でプリントやワークシートを作成するという回答が多く、普段の授業で使用している教材・教具では、板書カードが最も多かった。板書カードは簡単に使うことが出来るほか、繰り返し使用できるという利点があげられる。授業に役立つ教材・教具としても「使いやすい」、「繰り返し使える」といった回答が得られ、これらの視点は教材開発を行う上で重要な要素といえる。また、視覚的にうたえる教材がほしいという回答が得られ、先行研究でも明らかにされているように、特に住居領域においては、生徒にイメージがつきにくい分、視覚的な教材の開発が望まれている。視覚的な教材としては、情報機器やICTの活用が考えられるが、現在の教育環境からみると、普及するには金銭面と設備面で課題が残る。そのため、教育現場での普及を考えた場合、視覚的であるが安価な教材が望まれる。授業に役立つ教材でもあげられていたが、授業で使用する上で「お金がかからない」という視点は重要な要素といえる。

生徒へのアンケート調査からは、家庭科で好きな授業形態は、「実習」72.2%が最も高く、家庭科が好きな理由としても「調理実習や被服実習が楽しいから」等の回答が多くみられた。また、かるたの経験も9割以上の者が経験ありと答え、授

業手法として有効であるといえる。

以上の結果を踏まえ、当研究では、①プリント・ワークシート・板書カードへ応用できる、②繰り返し利用できる、③視覚的なもの、④安価である、⑤生徒の興味・関心が高い実習につながる、の5つを教材開発の視点とした。それらを踏まえ、次報では、具体的な教材開発の立案を行う。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

本研究は、科学研究費補助金（平成21年度～平成22年度 若手研究（B）課題番号21700733 新学習指導要領に対応した家庭科教育の授業研究－地域性を生かした住居領域の教材開発－ 研究代表者 黒光貴峰）に基づく研究の一環として行われたものである。

## 参考文献

- 1) 速水多佳子, 関川千尋, 学校教育における住居領域の教育システムの有効性について, 日本家政学会誌, Vol. 51, No.4, pp. 317-330 (2000)
- 2) 宮崎陽子, 岸本幸臣, 大学生による高等学校家庭科における住居学習の評価と課題, 日本家政学会誌, Vol. 59, No. 4, pp. 245-253 (2008)
- 3) 碓田智子, 福岡県における地域性に対応した住教育に関する研究－高等学校および中学校の家庭科担当教員を対象として－, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 第43号 (2000)
- 4) 岡田みゆき, 白井由貴子, 小川育子, ライフステージでとらえる住生活の授業実践 (第1報) 授業構成, 日本家政学会誌, Vol. 51, No. 1, pp. 41-49 (2004)
- 5) 鳥井葉子, 馬場亜沙美, 中林啓, 茨木宏美, 石井淳子, 木下みゆき, 石田紘子, 新学習指導要領実施に向けた家庭科の教育実践上の課題, 鳴門教育大学研究紀要 第24巻 (2009)
- 6) 宇野浩三, 北海道の地域特性に立脚した住教育の確立－教育内容の確立と教材の開発のための基盤研究－平成11～12年度文部省科学研究費一般研究 (C) 研究成果報告書
- 7) 関川千尋, 速水多佳子, 家庭科教育における住居領域の教材開発に関する研究－市販教材の実情, 京都教育大学紀要94, pp. 27-40 (1999)
- 8) 黒光貴峰, 関川千尋, 学校教育における住居領域の教材開発 (I)－コンピュータを使った住み方シミュレーション教材の組み立て－, 日本家庭科教育学会誌, 第48巻, 第4号, pp. 298-307 (2006)
- 9) 関川千尋, 黒光貴峰, 学校教育における住居領域の教材開発 (II)－コンピュータを使った住み方シミュレーション教材の組み立て－, 日本家庭科教育学会誌, 第48巻, 第4号, pp. 308-318 (2006)
- 10) 関川千尋, 黒光貴峰, 学校教育における住居領域の教材開発研究 (I)－コンピュータを使った中規模住宅の住み方演習教材の組み立て－, 京都教育大学紀要No. 112, pp. 31-40 (2008)
- 11) 関川千尋, 黒光貴峰, 学校教育における住居領域の教材開発研究 (II)－コンピュータを使った中規模住宅の住み方演習教材の有効性の検討－, 京都教育大学紀No. 112, pp. 41-52 (2008)
- 12) 6) と同じ
- 13) 西島芳子, 地域性を生かした住まい・まちづくり教育の教材開発と教育実践に関する研究, 平成13～14年度文部省科学研究費基盤研究 (C) 研究成果報告書
- 14) 3) と同じ
- 15) 田中勝, 地域型木造住宅「甲斐の家」を活用した体験型住生活学習プログラムの開発に関する研究, 平成17～19年度文部省科学研究費一般研究 (C) 研究成果報告書
- 16) 分校淑子, 錦引伴子, 山岸雅子, 高等学校「住居領域」の教育内容, 方法の検討 (第1報)－研究の枠組みと授業案の作成－, 日本家庭科教育学会誌 題40巻 第2号
- 17) 4) と同じ
- 18) 白井由貴子, 岡田みゆき, 小川育子, ライフステージでとらえる住生活の授業実践 (第2報) 授業評価, 日本家政学会誌, Vol. 55, No. 1, 51～58 (2004)
- 19) 文部科学省, 学習指導と学習評価に対する意識調査, (2010)